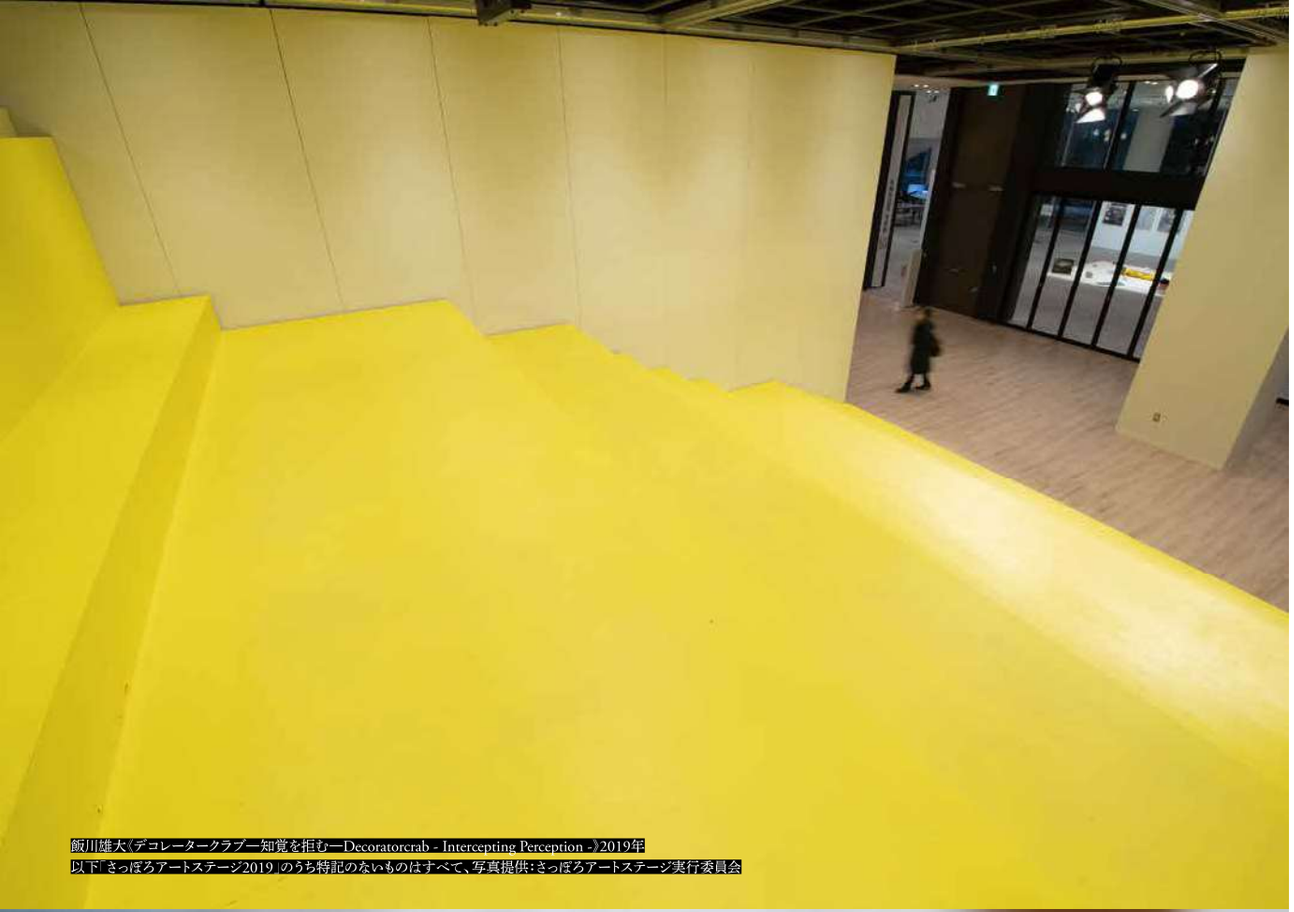
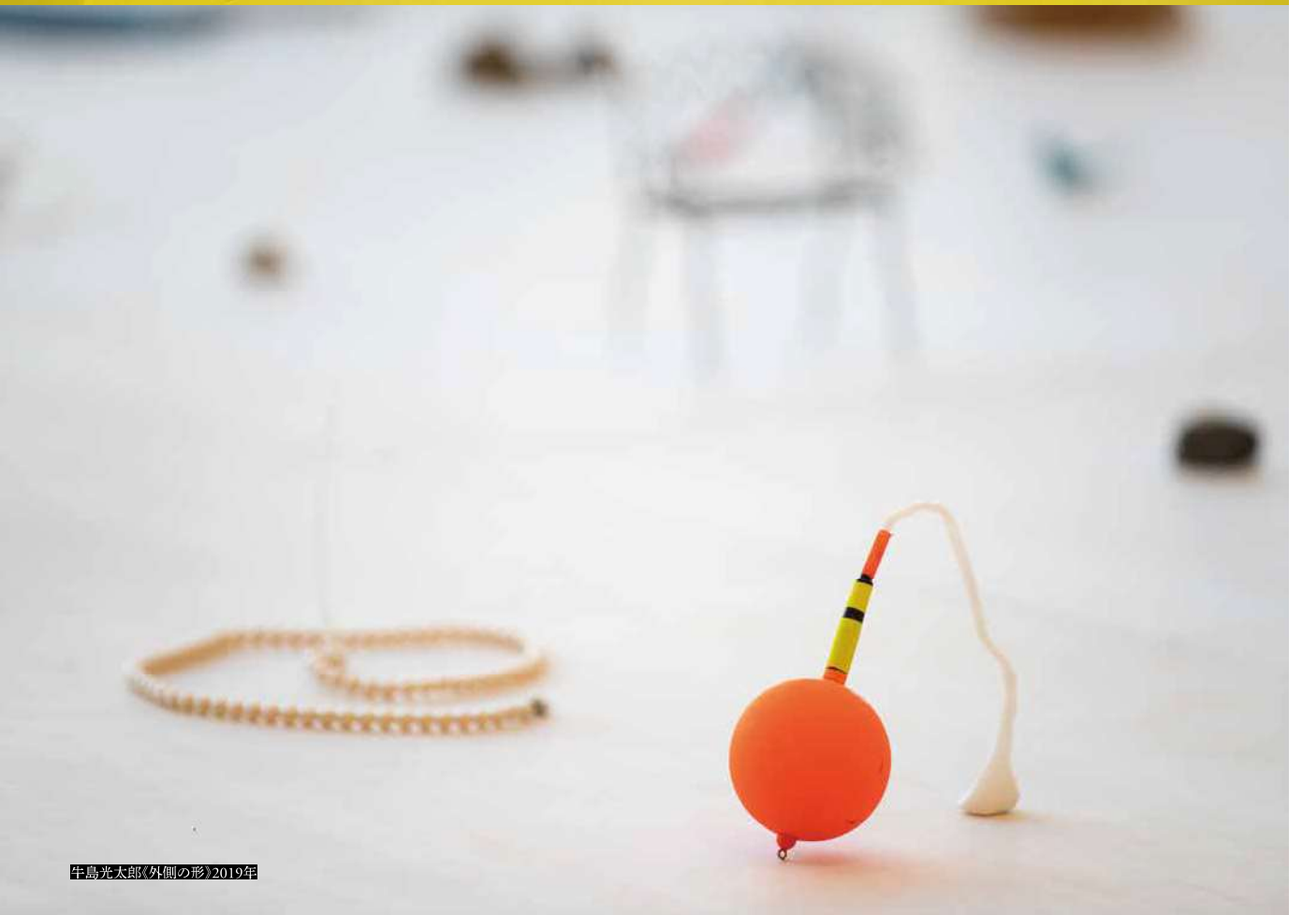


飯川雄大《デコレータークラブ―知覚を拒む―Decoratorcrab - Intercepting Perception -》2019年
以下「さっぽろアートステージ2019」のうち特記のないものはすべて、写真提供：さっぽろアートステージ実行委員会



牛島光太郎《外側の形》2019年

# さっぽろアートステージ2019

SAPPORO ART STAGE 2019

**会期**　2019年11月3日（日・祝）～24日（日）

**会場**　SCARTSコート、SCARTSスタジオ、SCARTSモールA・B・C

**入場料**　無料

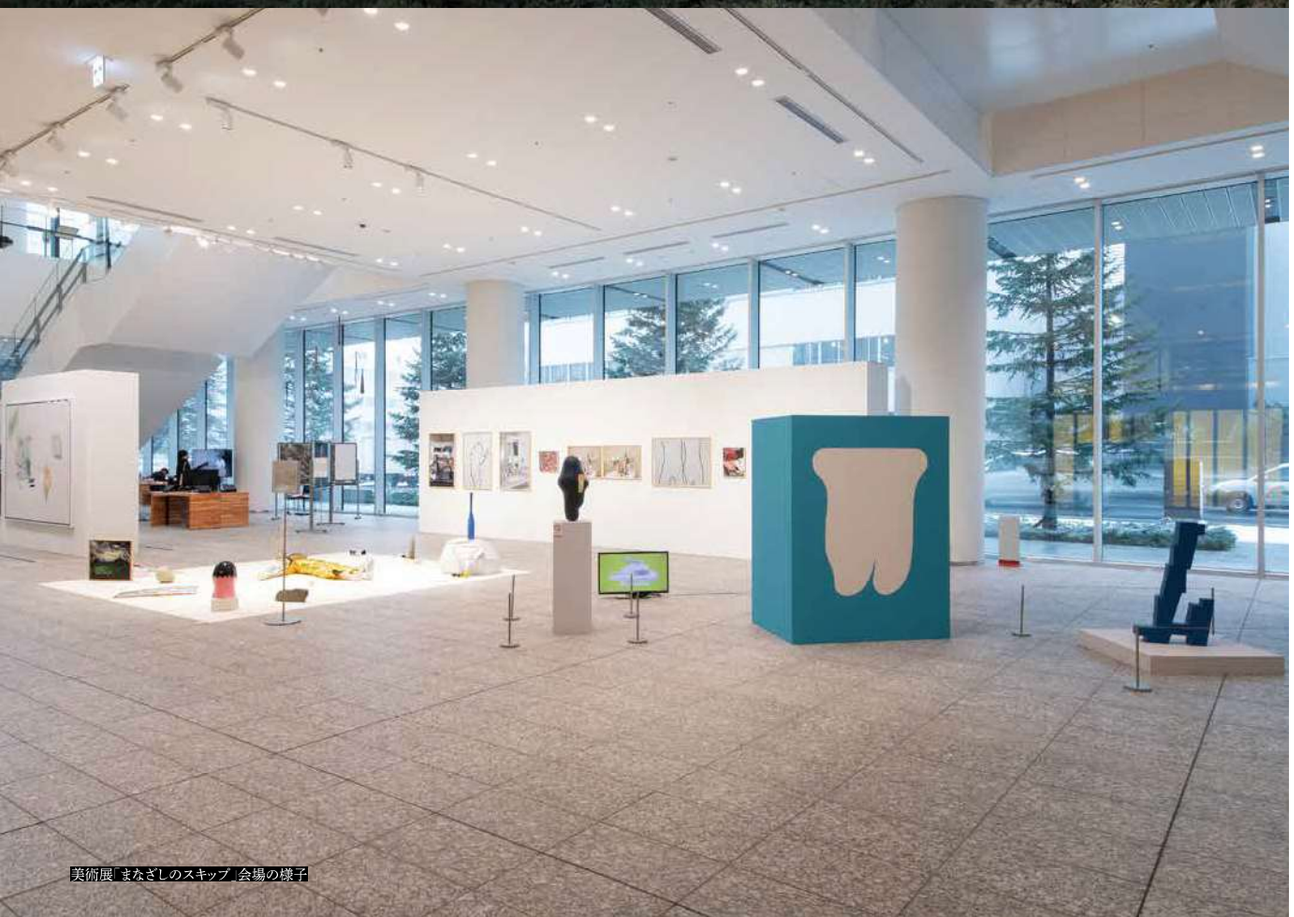
**主催**　さっぽろアートステージ実行委員会

**総合プロデューサー**　端聡（美術家／CAI現代芸術研究所）

札幌市民交流プラザが会場となり2年目となる2019年のアートステージでは、美術部門「ART STREET」の企画として、「見ること」をテーマとした美術展「まなざしのスキップ」を開催しました。さまざまな人が訪れる複合施設だからこそ、ふと目についた作品をきっかけに思いがけないアートとの出会いをつくれるのではと、日常からの気づきを出発点に表現の幅を広げている作家を紹介しました。

また、KIDS ART FESの企画として、ワークショッププログラム「家 Yeah Park（イエ イエーイ パーク）」を開催しました。さまざまな廃材をもとに遊びを創作していくことで、身近なものから発想する力を育み、創造的な場をつくっていくプログラムです。

美術展「まなざしのスキップ」歩道から見えるよう設置されたパネル


美術展「まなざしのスキップ」会場の様子

作者の視線を追った先、ささやかに広がる世界

# 美術展「まなざしのスキップ」

**会期** 2019年11月3日(日・祝)～24日(日) 10:00～19:00 ※会期中無休

**会場** SCARTSコート、SCARTSモールA・B・C

**協力** さっぽろ天神山アートスタジオ、紅櫻公園

**入場料** 無料

**出展作家** 飯川雄大、石場文子、牛島光太郎、鈴木淳、鈴木悠哉、長谷川裕恭、山崎愛彦

**キュレーター** 小山冴子(札幌文化芸術交流センター SCARTS)
**テクニカルディレクター** 岩田拓朗(札幌文化芸術交流センター SCARTS)
**テクニカルコーディネーション** 福津圭佑(札幌文化芸術交流センター SCARTS)
**テクニカルスタッフ** 神坂知春(札幌文化芸術交流センター SCARTS)
**コーディネーター** 佐野由美子(CAI現代芸術研究所)

美術展「まなざしのスキップ」では、日常の中での小さな発見や違和感をもとに表現活動を行っているアーティスト7名を紹介しました。

アーティストは作品を通して、自分たちの捉えている世界やその方法を、
私たちに見せてくれます。
作品に目をむけ、作者の視線―まなざし―を追うように、見つめてみてください。
それぞれの作品は、私たちのまなざしの向かう先をほんの少しだけ変えてくれるでしょう。
そのことによって、私たちの見ている世界も、
少しだけ広がって見えてくるのかもしれません。
まるで爪先立ちをしたときのように、階段を一段だけ上がったときのように、ささやかに。
それは小さなスキップにも似ています。
この場所から始まるまなざしのスキップは、
私たちをどのような場所へ連れていってくれるのでしょうか。

［関連イベント］

## アーティストトーク

**日時**　① 2019年11月3日（日・祝） 14:00〜15:30
② 2019年11月17日（日） 11:00〜12:00
**会場**　SCARTSコート、SCARTSモールA・B・C
**参加費**　無料
**出演**　① 飯川雄大、鈴木淳、鈴木悠哉、山﨑愛彦
② 石場文子、牛島光太郎、長谷川裕恭
**モデレーター**　小山冴子（札幌文化芸術交流センター SCARTS）

参加作家によるアーティストトークを行いました。作品を一つひとつ巡りながら、それぞれのアーティストに、今回の作品や日々の制作について幅広く話を伺いました。参加者からの質問や感想も多数寄せられ、トーク終了後も賑やかに話が続いていました。

## アートコミュニケーターによる鑑賞サポート

**日時**　2019年11月24日（日） ①10:30〜11:30／②13:30〜14:30
**集合**　SCARTSモールA・B
**案内**　SCARTSアートコミュニケーター

市民とアートのつなぎ手として活動するSCARTSアートコミュニケーターと、作品についてお話ししながら鑑賞を楽しむ「対話による鑑賞」を行いました。

※「まなざしのスキップ」におけるアートコミュニケーターの活動詳細についてはp.259参照



## 飯川雄大

### 《デコレータークラブ―知覚を拒む―Decoratorcrab - Intercepting Perception -》

SCARTSコートいっぱいの階段のようなもの。見ると「登りたい！」という衝動が生まれます。しかし登りはじめてみると、段の幅や高さがまちまちで、登りづらかったり、つんのめってしまったり、自分が想定していたものと現実とのズレが生じます。私たちの認識はいつも視覚と共にあり、それによって、次に起こる体験を先に想定しすぎているのかもしれません。
デコレータークラブは「擬態する蟹」という意味の作品シリーズです。飯川雄大は、伝達と情報の間に生じるズレや意味について、このシリーズで問いつづけてきました。情報によってあらかじめ想定される認識から逃れ、あるものをそのまま受け止めることができたとき、私たちはもっと自由に、この世界を捉えることができると作品は示しているようです。

《デコレータークラブ―知覚を拒む―Decoratorcrab - Intercepting Perception -》2019年　撮影：飯川雄大

撮影：飯川雄大

撮影：さっぽろアートステージ実行委員会

### 飯川雄大

1981年兵庫県生まれ、同地を拠点に活動。人の認識の不確かさや、社会の中で見逃されがちな事象に注目し、鑑賞者の気づきや能動的な反応を促すような映像やインスタレーションを制作。近年の主な展覧会に、ヨコハマトリエンナーレ2020「Afterglow－光の破片をつかまえる」（横浜美術館ほか、2020年）、「デコレータークラブ―知覚を拒む」（高松市美術館、2020年）「六本木クロッシング2019展：つないでみる」（森美術館、東京、2019年）、「開館30周年記念特別展 美術館の七燈」（広島市現代美術館、2019年）など。

## 牛島光太郎
### 《外側の形》

大きな台に並んでいるのは、牛島光太郎が日常の中で拾いあつめたモノたちです。牛島は当初、一つひとつのモノのために彫刻台を作ろうと考えていました。しかし、モノと向き合い作業を進めるうちに、それはだんだんと、おかしな形になっていったのだといいます。
牛島はこれまで、日常の中で拾い集めたオブジェにささやかなエピソードや言葉を添えることによって、新しい物語や時間を想起させるような作品を制作してきました。今回、モノと向かいあううちに見出された、まるで植物の芽のようなそれぞれの形は、これらのモノを使っていた人たちの日常の形であり、モノ自体が過ごしてきた時間の形なのかもしれません。

《外側の形》2019年

### 牛島光太郎

美術家。1978年福岡県生まれ、松山市在住。言葉を用いた作品を制作。日本での活動に加えて、ドイツ、台湾、中国、ニューカレドニアなどで作品を発表。関西国際空港や百貨店の吹き抜けなど公共空間への大規模な作品設置のほか、里山や市街地でのアートプロジェクトを実施。近年の主な展覧会に「モノの居場所に言葉をおいたら、知らない場所までとんでいく」(3331 Arts Chiyoda、東京、2019年)、「六本木アートナイト2018」(東京、2018年)など。著書に『一枚物語 ちぐはぐな日々のはなし』(アリエスブック、2020年)。



## 鈴木悠哉
### 《meta-monuments》《archegraph》

大きな立体に、白い不思議な形。丸っこい形、ジグザグな形、いろいろな形が見えます。歯のような、瓢箪のような、雷のような……実はこれは、作家が風景の中から切り取った形です。
鈴木悠哉は、これまでに数多くのドローイング作品を制作してきました。それらの作品では、まちなかで見つけたさまざまな形—例えば看板の腐食した部分の形や、水たまりの形など、誰も気にもとめないような形も含まれています—を、デフォルメして描いてきました。鈴木の目が切り取った日常の中の形は、より抽象的な形に変換され、見る者にさまざまな形を想像させます。

《meta-monuments》2019年

《archegraph》2019年

《archegraph》2019年

### 鈴木悠哉

美術家。1983年福島市生まれ。日本大学芸術学部美術学科版画専攻卒業。近年は札幌を拠点としながら、都市環境の観察をベースとしたドローイングのプロジェクト「archegraph study」を東アジアの都市を中心に展開している。近年の主な展覧会に「New Excavation」(木木藝術、台南、2019年)、「Futuristic Allegory」(候鳥空間、北京、2019年)、「アッセンブリッジナゴヤ2016」(名古屋名港地区、2016年)、札幌国際芸術祭2014(500m美術館、札幌、2014年)など。

## 石場文子

### 《2と3、もしくはそれ以外（祖母―彼女―彼）》

ずらりと並んだ写真作品。写真のはずですが、なんだか絵のようにも見えます。よく見ると、被写体の輪郭線が縁取られ、強調されています。また、輪郭線は写真の上からではなく、被写体に直接描かれた上で撮影されています。奥行きがあるはずの写真が二次元にも見えてしまう、その錯覚に、見る者は戸惑いを覚えます。
石場文子は、視覚情報からくる認識の問題について考え、実験し続けています。また、目線をずらしたような組写真や、被写体に鏡をとり入れる事によって、ひとつの作品の中にも複数の視線や物語を紛れ込ませます。作品は、私たちが目で見ることで認識している世界の揺らぎやすさと、目で受け取る情報から物語を想像する豊かさを同時に提示しています。

《2と3、もしくはそれ以外（祖母―彼女―彼）》2019年

### 石場文子

美術家。1991年生まれ、愛知県在住。愛知県立芸術大学美術研究科博士前期課程油画・版画領域修了。視覚情報から得る人間の認識の問題を追及し、近年では被写体に黒いペンで線を描き、写真を撮る〈2と3のあいだ〉〈2と3、もしくはそれ以外〉シリーズで、視覚的な違和感を与える写真作品を制作している。近年の主な展覧会に、「あいちトリエンナーレ2019 情の時代」（愛知県美術館、2019年）、「VOCA展2019 現代美術の展望―新しい平面の作家たち」（上野の森美術館、東京、2019年）、など。



## 長谷川裕恭

### 《きみのうた2019》

石や木、段ボールやアルミなど、さまざまな素材でできた作品が、床面に配置されています。段ボールを圧接して立体にしたような人、おだやかな顔をした、柔らかそうな石の彫刻。素材がこれだけ多様なのにもかかわらず、一目見るだけでは、その重さの違いを想像することは難しいようです。
長谷川裕恭は、さまざまな素材を用いて物語性のある彫刻作品を制作しています。使用する素材は、作品のもつ物語やテーマによって選ばれ、そこに素材のヒエラルキーはありません。それぞれの彫刻が、一つひとつ異なる重さや存在感をもったまま、同じ空間に佇んでいます。それは、わたしたち一人ひとりが、異なる物語をかかえながらこの世界に生きていることと同じであるかのようです。

《きみのうた2019》2019年

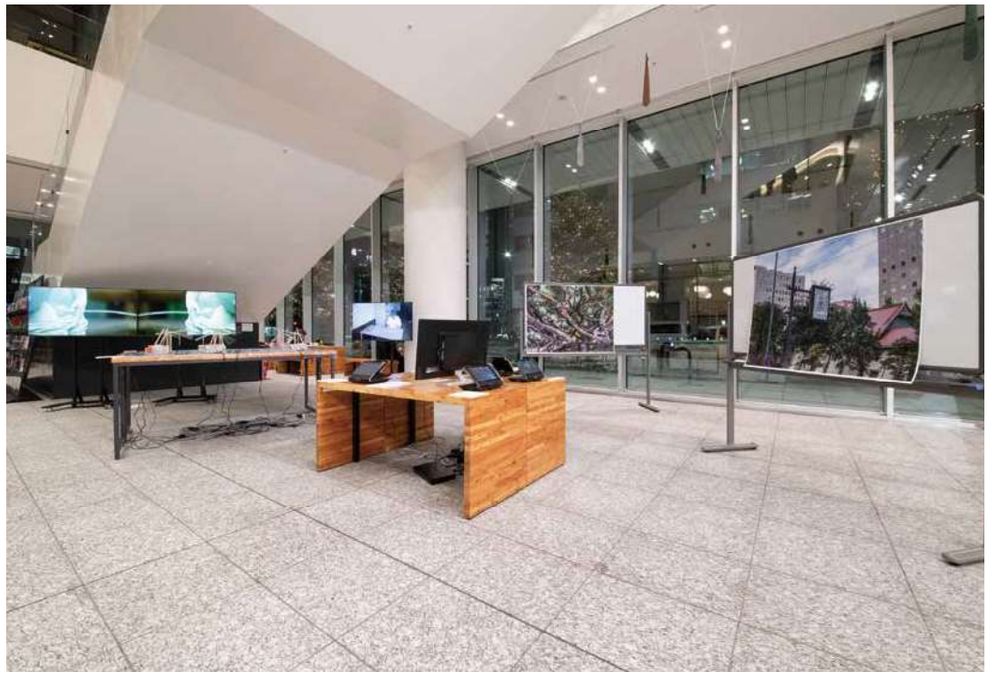
### 長谷川裕恭

彫刻家。1976年生まれ、江別市在住。2002年北海道教育大学大学院修了。北海道美術協会（道展）会員。段ボールや石、木など様々な素材を用いた、物語性のある彫刻作品を制作。近年は、人と社会の関わりをユニークな視点で表現している。近年の主な展覧会に、「記憶素子―丸山隆と教え子たち展」（本郷新記念札幌彫刻美術館、札幌、2017年）、「知覚されるアート」（モエレ沼公園ガラスのピラミッド、札幌、2015）、「セブン・ストーリーズ」（本郷新記念札幌彫刻美術館、札幌、2014年）。

## 鈴木淳

### 《札幌、調整中》

鈴木淳の作品には、いつも日常や認識への問いかけがあります。現在1,000作を超えるビデオシリーズ《だけなんなん／so what?》（北九州弁で「だから、どうしたの?」という意味）は、日常風景を切り取ったビデオ作品に独特のタイトルをつけることで、意味をズラし、風景を変え、日常と自分との関係性を考えさせてくれます。《もの、かたる》で樺太についての古い文献にインタビューをする大学教授や、発電所とは真逆の行為を可視化した《逆発電所》、エスカレータ横に何気なく置かれた《落ちている金髪》など、その作品はおかしみとアイロニーに富み、新しい視点を与えてくれます。



《札幌、調整中》2019年

《札幌、調整中》より《落ちている金髪》

《札幌、調整中》より《あしがみえる》
撮影：鈴木淳

《札幌、調整中》より《逆発電所》

### 鈴木淳

美術家。1962年北九州市生まれ、在住。1987年熊本大学理学部生物学科卒業。普段の生活で見慣れた風景や、「もの」「こと」、場の見え方・考え方や人との関係性をずらし、知らず知らずのうちに身体・感覚・記憶に刷り込まれている都市の機能やシステムに揺さぶりをかける作品群も展開している。個展に「なにもないということもない」（福岡市美術館、2012年）。グループ展に「写真新世紀2011」（東京都写真美術館、2011年）、「誉のくまもと展」（熊本市現代美術館、2017年）など。



## 山崎愛彦

### 《インドアプランツとインドア》

壁の両面に絵画がかけられています。両面を順に見ていると、一方の絵画に描かれた植物が、もう一方の絵画の中にも描かれ、それを見ている私も、絵の中にすでに描かれていることに気づきます。ふたつの絵と展示会場とが入れ子になって、繋がっているようです。
山崎愛彦は、作品を制作する際に、まずさまざまなイメージを組み合わせ、構成してからキャンバスでの制作を始めます。そして、塗り残しや線描き部分を残した状態で制作を止めています。完成することのない作品は、たくさんの余白があるからこそ、見る者それぞれのイメージによって補完され、見る人ごとに別の作品として認識されるのです。

《インドアプランツとインドア》2019年より

《インドアプランツとインドア》より

### 山崎愛彦

美術家。1994年札幌市生まれ。画像やドローイングを継ぎ接ぎしてつくった完成像をもとに、キャンバスに描画を行い、ゴールとなる完成像の何歩か手前で完成とする制作方法をとる。描きかけ、塗り残しというメイキングのような手法で、これからも続く塗りの予感を持たせて補完させる作品を制作。近年の主な展覧会に「シェル美術賞展2020」（国立新美術館、東京、2020年）、「開館50周年記念 リニューアル記念 mima, 明日へのアーティストたちとともに」（北海道立三岸好太郎美術館、札幌、2018年）など。

# 軽やかに跳躍するまなざし

熊谷周三（角川武蔵野ミュージアム学芸員）

## 風景を変える違和感

目の前に絵画のようなものが飾られている。でも、何か変だ。よく見ると、どうやら写真のようだが、モティーフがマンガのように黒く縁取られている。二次元と三次元が互いに居心地悪そうに同居しているようだ。

真黄色の階段が唐突に目の前に現れる。自由に登っても良いようだが、足がもつれ、うまくいかない。これはどうしたことか。

子どもの頃に親に買ってもらったまま実家の机の中に眠っていたような小物が、台の上にきれいに並べられている。そこから触手かキノコの菌糸のような不可思議なものが生え、小物を支えている。しかし、なぜ。

そんな作品たちが、人が多く往来する空間に人と同じ温度で佇んでいた。最初はそれらの違和感に驚くものの、そのうちだんだん心地よくなり、その違和感に身を委ねたくなってくる。身体や目の仕組みが少し変わってしまうような、不思議な感覚に陥る。

この展覧会のタイトルは「まなざしのスキップ」という。参加作家は、飯川雄大、石場文子、牛島光太郎、鈴木淳、鈴木悠哉、長谷川裕恭、山﨑愛彦。一見して軽やかでポップ、しかし、消費されないザラつくマイナーさを纏う、絶妙なラインナップだ。その軽やかなタイトルとは裏腹に、目の前の風景をふっと変えてしまうラディカルさを持っていた。

## まなざしは誰のものか

まなざしとは何か。その問いに対し、認知・神経科学から、哲学、マーケティングの分野までさまざまな応答が試みられてきた。

眼球に飛び込んできた光は網膜によって電気信号に変換され、パターン認知や情報選択など脳の働きによりフィルターがかけられ処理される。世界にある膨大な情報を変換・縮減させる機能だ（そうでないと、私たちは目の前に見えているものがコップなのかどうなのかを認識するのにえらく時間がかかってしまうだろう）。しかし、その情報の取捨選択や補正によって、世界認知の歪みもまた発生させてしまうのも事実だ。私たちは世界そのものをそのまま見ることは出来ず、まなざしは予め偏向されている。

一方、まなざし自体には「見る見られること」「まなざすことの暴力」など、人と人の関係性や権力構造という問題系が内在する。まなざすことは人間の営みの根幹に触れるものでもあるが、しかし、大抵の場合その行為は無自覚に行われており、日常の中で意識される機会は極めて少ない。

メディア・マーケティングでは、まなざしは欲望や感情に紐づけられ消費行動を促す重要な要素として捉えられている。視線誘導から一定の感情を促すタイミングまでが精緻に計算され、広告を始め至る所に実装されている。私たちは知らず知らずのうちに「これをみよ、反応せよ」というメッセージをさまざまなメディアから受け取っているのだ（この手法はプロパガンダにもそのまま応用されるだろう）。

そのような中で、ここにある作品たちは、まなざしを解放しようという意思を持っているように思う。まなざしの偏向に気づかせ他者のコントロールから自由になることを。

## まなざしの抜け道

そのような変革や解放を促すようなラディカルな表現はしかし、必ずしも「深刻さ」や「真面目さ」とはイコールにはならない。変革を求める強い意志は、表現の重心を定めてくれる大切な要素だが、同時に、過剰な批判は独善や教義＝ドグマ化させてしまう危険をはらんでいる。ともすれば、異なるフィルターを付け替え、違う主体によるコントロールを許してしまうことにもつながってしまう。

それに対し、今回の作品たちが持っている、ある種の「ユーモア」や「軽やかさ」は、ドグマへの道をキャンセルさせる機能を持つ。例えば、エレベーター下でみかけたあの金髪は、何かしらのメッセージがあったのだろうか。もしかしたらないのかもしれない。こちらを向いてさえいない。しかし、その金髪の風景は自分の視覚を横切り、スーッと通り抜けていく。フィルターには隙間があることを気付かせてくれる。反発し抵抗するのではなく、風通しを良くして出入りを自由にすること。それが、まなざしを変革するための抜け道であることを、この作品たちは心得ているように思う。

切実でラディカルな表現とは、案外こんな風に、笑いながら軽やかにまなざしを跳躍することなのかもしれない。

美術展「まなざしのスキップ」会場の様子

ガラクタさんでつくった看板「家 YEAR PARK」

たくさんのガラクタさんから、何ができるかを考える

さまざまな素材や形のガラクタさん

ぶら下げたり、ちぎったり

ガラクタさんで洋服をカスタマイズ

# KIDS ART FES
# 「家 Yeah Park（イエ イエーイ パーク）」

## 「ガラクタさん」を使った遊びが集まって、みんなの公園が生まれる

| | |
|---|---|
| **会期** | 2019年11月3日（日・祝）、4日（月・休）、9日（土）、10日（日）、16日（土）、17日（日）、23日（土・祝）、24日（日） |
| **時間** | ①10:30〜12:00／②13:30〜15:00 |
| **会場** | SCARTSスタジオ |
| **入場料** | 無料 |

| | |
|---|---|
| **ワークショップデザイン・総合監督** | 臼井隆志（ワークショップデザイナー） |
| **監修** | 深澤孝史（美術家） |
| **企画・コーディネート** | 渡部智穂（札幌文化芸術交流センター SCARTS） |
| **コーディネーター** | 佐野由美子（CAI現代芸術研究所） |
| **ファシリテーター** | 稲垣恵、植田美知代、卜部奈穂子、大澤香織、海藤あさひ、柿崎等、清部恭平、塩島瑶子、曽木美奈子、深澤梨恵、古家衣梨、堀内まゆみ、八木澤つぼみ、山際愛、Elena Sandu |

**廃材提供協力企業**

株式会社アイテックサプライ、株式会社遠藤木型、オーダースーツ HANABISHI 札幌店、カナリヤ 札幌本店、有限会社齋藤印舗、札幌芸術の森 クラフト工房、札幌芸術の森美術館、札幌市立大学 上遠野敏先生、株式会社佐藤印舗、株式会社シモクニ、大丸藤井セントラル株式会社、野田額縁店、ピアノワークス、ペーパーショップサクマ、株式会社マリヤ手芸店、株式会社三室印房、モリタ株式会社、ADOLFO DOMINGUEZ SPAIN

札幌市内の企業等よりゆずり受けた廃材（ガラクタさん）を素材に、普段の家での遊びを再現して、遊びと場をつくり出すことをテーマにしたワークショッププログラムを行いました。

・ここは家でもあり、公園でもある
・ここにあるものは自分のものでもあり、みんなのものでもある
・言われたことをやってもいいし、やらなくてもいい

という3つのルールのもと、子どもたちは一緒に会場を訪れた保護者やファシリテーターと共にさまざまな遊びを開発していきました。プログラムと場の設計はワークショップデザイナーの臼井隆志と美術家の深澤孝史が担当。場づくりのための重要な役割を担うファシリテーターは一般から公募し、プログラムの深め方や当日の進行、参加する子どもたちへの気配りなど、実践を通して学ぶ機会となりました。

ファシリテーターの役割についてレクチャーを行う臼井氏

ファシリテーターミーティングの様子

プロジェクトの説明をする深澤氏

プログラムのはじまりには、参加者へ3つのルールの説明を行う

ファシリテーターが子どもたちの創作に関わることも

楽しく安全に遊ぶ

1日が終わると振り返りを行い、次回のプログラムにつなげる

## ［関連イベント］

### 「家 Yeah Park」説明会（ファシリテーターミーティング）

**日時**　2019年9月23日（月・祝）13:00〜16:00
**対象**　一般
**会場**　控室401（札幌市民交流プラザ4階）
**講師**　臼井隆志（ワークショップデザイナー）、深澤孝史（美術家）

ファシリテーターとしてワークショップの運営に参加することを希望する方を対象に、プロジェクトの開発を行うワークショップデザイナーの臼井隆志氏と美術家の深澤孝史氏による説明会を実施しました。深澤氏のこれまでの活動紹介や、臼井氏のレクチャー、グループワークを通じて、今回のプロジェクトで軸とするべきテーマを共有しました。

### 臼井隆志

ワークショップデザイナー。1987年東京都生まれ。2011年慶應義塾大学総合政策学部卒業。質的調査、ワークショップデザインの手法を用い、子ども・親子向け教育サービスの開発を行っている。子どもの居場所である児童館にアーティストを招聘するプログラム「アーティスト・イン・児童館」の企画・運営（2008〜2015年）、ワークショップを通して服をつくるファッションブランド「FORM ON WORDS」の企画（2011〜2015年）などを手掛ける。2015年から伊勢丹新宿店の教育事業「cocoiku」に従事し、販売員へのファシリテーション教育、0〜6歳の親子教室「ここちの森」の企画開発、体験型販売フロア「cocoiku park」の企画開発などを行う。著書に『意外と知らない赤ちゃんのきもち』（ピースオブケイク、2018年）。

### 深澤孝史

美術家。1984年山梨県生まれ。北海道在住。理念と活動を行き来しながら作品を制作している。主な活動として、漂着神の伝説が数多く残るまちで、漂着廃棄物を現代の漂着神として祀る神社を建立した《神話の続き》（奥能登国際芸術祭、石川、2017年）、お金のかわりに自身のとくいなことを運用する《とくいの銀行》（取手アートプロジェクトほか、2011年〜）、新興住宅地の空き家を映画館として開きつつ、ニュータウンと地域の信仰の関係を更新する映画を制作する《New Town My Home Teater／信仰住宅地》（のせでんアートライン、兵庫、2019年）など。